



〔写真提供〕
RUSK Today, Winter 1990
New York University
Medical Center

平成元年も残り少ない慌しい気分の頃に、突然新聞紙上でラスク (Howard A Rusk) 先生の訃音に接した (1989年11月4日、享年88歳)。

ラスク先生は数年前から御病氣のために歩行も不自由となられ、何処かに御入院中であるという噂を耳にしたことがある。しかし、それ以上のことを確認するすべもないままに時を過ぎてしまった上での突然のニュースであった。私は取り敢えずお悔みの英文を作り、ニューヨークの留守宅にお送りした覚えがある。

たまたま帝京大学の岩倉博光教授に国際義肢装具連盟のお仕事で神戸でお会いした折りにお話ししたところ、日本にいるラスク先生の息のかかった方々のうちの有志からお香典を集めてお送りしては、ということになり、岩倉教授がその労をお取りくださるというので、「是非ともよろしく願います」と申し上げたのであったが、それからわずか数週間後の1月13日には岩倉教授御自身が突然お亡くなりになるという、まことにショッキングな出来事のために、この話は自然に立ち消えになってしまった。今にして思えば、私が何とかしてその遺志を継ぐべきであったのだろうが、それがこの追悼文という違った形で実現されることになったのは、岩倉教授に対する申しわけにもなるだろうと思うしだいである。

ラスク先生の御薫陶をいただいたのは、日本人では私が最初であったようにいわれているが、実は私の前

に川合(?)さんという女医さんがおられたことをラスク先生の口からお聞きしたことがあるので、私は実は2人目の日本人ということになる。川合さんからは面識をいただくこともなく、その後帰国してしまわれたらしい。私のあとには七沢リハビリテーション病院の横山巖先生が続き、さらに東大の上田敏先生が続いて、延べ20名余りの方々がラスク先生の門を敲かれたことになる。

ラスク先生はもともとミズーリ州ブルックフィールドでお生まれになり、ミズーリ大学でバチェラーの称号を得たのち、ペンシルベニア大学医学部を卒業されてMDの資格を取り(1925)、セントルイスで開業された。大変評判がよく、医業は繁昌し、2人の同僚を抱えるまでに発展したが、第二次世界大戦のために方向転換せざるを得なくなり、空軍へ入隊した。そして医療部隊のチーフとなられ、空軍大佐となった。当時の空軍病院では多くの戦傷病者が何のなすすべもなく、ただ漫然として臥床して日を送っているに過ぎなかった。これを目撃するにつけ、ラスク先生は、何とか積極的に訓練を施すことにより、日常生活活動の能力を獲得し、さらに職業能力を身につけ、社会復帰にまで漕ぎつけることができれば、これら傷病兵を再びtax-payerとして社会に貢献できるようにし得るとの確固たる信念の下に、自己のリハビリテーションの理念を実行に移していった。

Howard A Rusk 先生の思い出

御逝去を悼みて

土屋 弘吉

(横浜市総合リハビリテーションセンター)

戦後、ラスク先生はニューヨーク大学において物理療法およびリハビリテーション (PM & R) 科の主任教授となり、伝統あるベルビュー (Bellevue) 病院において一般市民の診療に当たった。同時にアメリカ大統領の政治顧問という要職に就き、国の政策にまで影響を与える立場となった。また大学の内部に Foreign Students' Training Program という外国人留学生訓練制度を作り、私が滞在した頃は約 60 名の諸外国からの医師のリハビリテーション教育が実施されていた。私の記憶に残っている出身国の国籍は、南米諸国 (ブラジル、コロンビア、アルゼンチン、チリー、ペルー、メキシコ、ヴェネズエラ、ドミニカ共和国、ボリビア、パラグアイなど)、東南アジア (香港、フィリピン、ビルマ、タイ、インド、マレーシア、韓国、日本など)、欧州各国 (イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、ギリシャ、スイス、スペイン、ポルトガル、ベルギー、フィンランドなど)、オーストラリア、ニュージーランド、北米大陸 (カナダ、アラスカなど) など、世界各国を網羅しており、我々の滞在中、ソビエトからも数名の医師が一時的に参加したこともあった。

このような企画はまだ開始以来日が浅く、若い卒業したての医師たちの興味をひき、勉強をしながらリハビリテーションを修得できるという点で各国の医師が進んで参加してきた。また新しい学問の体系であるリハビリテーションに若手医師をひきつける多くの魅力となった。

外国人医師の研修計画は大体 3 年を一応の期限としていたが、私などのように専門科目をすでに履修した医師にはもっと短縮した特別コースも用意されており、私の場合は初めから 1 年という契約の下にスタートした。ラスク先生が最も意に介していたのは、「リハ

ビリテーションのフィロソフィー」を体得させることにあったと思われる。当時、教官として教職に携わってくださった方々は 20~30 名ぐらいいいたと思う。私の記憶に残っている方々は Dr Deaver, Dr Covalt, Dr Moskowitz, Dr Goodgold, Dr Feldman, Dr Grynbaum, Dr Uunterecker, Dr Russek などをはじめとして、十指に余る方々の名を挙げることができる。しかし、多くの先生方はもう辞められたか引退されたかで、Dr Goodgold が昨年研究所の所長を辞められた後に私たちの知っている先生はいなくなった。

私が個人的に最もお世話になったのは、伊藤正元君である。同君は横浜市立大学整形外科医局員であったが、早々と渡米して Rusk Institute のスタッフに加わり、ニューヨークのゴールドウォーター病院で院長の Dacso 先生の片腕として活躍しており、私の渡米についても WHO の正式の手続きなど一方ならぬ御世話にあずかった。ここで厚く感謝の意を表するものである。最近のニュースでは、Dr Dacso 引退後、彼はそのあとを継いで院長職に就いた由である。

以上に延々と記してきたことは、30 年昔のビルビュー病院およびインスティテュートの姿であり、おそらく現状は大きな相違がいっぱいあるに違いない。しかし、私たちは常にラスク先生の気概に触れ、ラスク先生の理想に感化され、ラスク先生の実行力に鼓舞され続けてきた。ラスク先生の蒔いた種は今や世界各国で花開き、実を結びつつある。現に我が日本においても、今では 20 名を越す人々がリハビリテーションのフィロソフィーの実現に向かって、今もお邁進を続けている。この遺された種子は各地の土壌の中でたえず成長を続けてゆくことであろう。このことをラスク先生も最も大きく希望されていたのだと信じている。